英語の結果構文における結果述語の認可条件

山　根　一　文

On the License Conditions of Resultative Predicates in English Resultative Construction

Kazufumi Yamane

（2012年11月30日受理）

1．はじめに

英語の結果構文における結果述語は，AP（Adjectival Phrase），PP（Prepositional Phrase），NP（Noun Phrase）の３つのタイプに分けられる。それぞれ，He shot the tiger *dead*.（AP），He shot the tiger to *death*.（PP），He painted the fence *a vivid shade of blue*.（NP）を例に挙げることができる。しかしながら，これら３つのタイプは無条件で認可されるわけではない。

本論文では，２.で結果述語の認可条件を概観し，３.で The maid scrubbed the pot *shiny* /**shined*. 及び The joggers ran themselves *sweaty* /**sweating*. にみられるように，なぜ過去分詞，現在分詞から派生した AP は認可されないかを考えてみたい。[1)]

2．結果構文の特徴

結果構文の基本的な骨組は下記⑴のように示される。

⑴　S V(PP) NP RP(SP)
《RP → resultative predicate（結果述語），
(PP → primary predicate（一次述語），
SP → secondary predicate（二次述語）》

この骨組は次の⑵のような特徴を持っている。

⑵　a．単一の節内に動詞（一次述語）と結果述語（二次述語）が含まれる。
b．動作主の動作が対象に状態変化をもたらすという意味を表わす。
c．結果述語は動詞の目的語と叙述関係を結ぶ。

（小野2007a: 5）

このことを頭において，具体的な結果構文の例を見てみよう。

⑶　a．John hammered the metal *flat*.
b．They laughed themselves *silly*.
c．The dog barked my mother *awake*.
d．My brother broke the vase *into pieces*.
e．I painted the car *a pale shade of yellow*.

（Simpson 1983: 143）

上記⑶の a.，b.，c．は結果述語が AP，d．は PP，e．は NP の例である。b．は「彼らは笑いすぎて頭が働かなかった」の意味を持ち，e．は「私は車に色を塗って淡い色調の黄色にした」の意味を持つ。

下記⑷は表面的には結果構文と同じ構造を持つが，いずれも S（主語）の状態を描写しており，結果構文とは区別される。例えば，a．において，「車を運転した結果酔った」のではなく「酔った状態で車を運転した」と解釈されるため，drunk は結果述語ではなく描写述語とされる。b．においても同様に，「浴槽を掃除した結果はだしになった」のではなく「浴槽をはだしで掃除した」と解釈され，barefoot は S の描写述語である。

別刷請求先：山根一文，中村学園大学栄養科学部，〒 814-0198　福岡市城南区別府 5-7-1
E-mail：yamane@nakamura-u.ac.jp

[1)] 本論文は，第64回日本英文学会九州支部大会（於大分大学，平成23年10月29日）におけるシンポジウムで，『結果構文の研究と展望』という統一テーマのもとに発表した「英語の結果構文における結果述語の認可条件」を下敷きにしている。

⑷ 描写述語（depictive predicate）

a．Bill drove his car *drunk*.

b．She cleaned the bathtub *barefoot*.

c．He hit the road *running*.（彼は走って出かけた）

d．Ken ate the shrimps *uncooked*.

e．John ate the meat *raw tender*.（cf. *John hammered the metal *flat smooth*.）

上記⑷ e．で，raw と tender の２つの描写述語が生じているが，cf. で示すように，結果述語の場合は flat と smooth の２つの述語は容認されない。

次に様態副詞の具体例をみてみよう。

⑸ 様態副詞（manner adverb）

a．He tied his shoelaces *tight* / *tightly*.

b．He tied his shoelaces *loose* / *loosely*.

c．Mary cut the meat *thick* / *thickly*.

d．He spread the butter *thin* / *thinly*.

（Washio 1997: 17）

e．He pulled his tie *tight* / *loose*.

（Washio 1997: 18）

上記⑸ a．の tight / tightly，b．の loose / loosely，c．の thick / thickly，d．の thin / thinly，e．の tight / loose は，いずれも V（動詞）の様態を表わす副詞であり，これらは見せかけの結果構文と呼ばれるもので，結果構文とは区別される。

下記の⑹と⑺は移動（位置の変化）を表わす例である。

⑹ NP の移動（位置の変化）

a．Frank sneezed the tissue *off the table*.

（Goldberg 1995: 152）

b．They laughed the poor guy *out of the room*.

（Goldberg 1995: 152）

c．He wrenched the gun *out of her hand*.

d．She scrubbed the dirt *out of her skirt*.

（Napoli 1992: 57）

e．The cook cracked the eggs *into the glass*.

（Levin and Rappaport Hovav 1995: 60）

（cf. My brother broke the vase *into pieces*.）

⑹はいずれも目的語の NP の状態の変化ではなく位置の変化を表わしている。例えば，a．は「くしゃみをしたのでティッシュがテーブルから落ちた」の意味であり，「くしゃみをした結果，目的語の NP（tissue）の位置がテーブルから移動した」ことを表わしている。b．は「彼らが笑ったので，かわいそうにもその人は部屋から出て行った」の意味であり，「彼らが笑った結果，目的語の NP（the poor guy）の位置が部屋の外に移動した」ことを示している。

下記⑺はいずれも主語の NP の位置変化を表わす文である。例えば，a．は「賢人たちは星の後を追ってベツレヘムを出た」の意味で，「星の後を追った結果，主語の NP（the wise men）の位置がベツレヘムから移動した」ことを示している。c．も同様で，「子供達は馬跳びをして公園を横切った」の意味であり，「馬跳びをした結果，主語の NP（the children）の位置が移動した」ことを表わしている。

⑺ S の移動（位置の変化）

a．The wise men followed the star *out of Bethlehem*.

b．He followed Lassie *free of his captors*.

c．The children played leapfrog *across the park*.

d．John walked the dog *to the store*.

e．John danced mazurkas *across the room*.

（Rothstein 2004: 84）

上記⑹と⑺のような NP の移動を示す文を結果構文に入れるかどうかに関しては意見の一致をみていない。[2] 次に影山（1996）が提案する本来的結果構文と派生的結果構文をみてみよう。

⑻ 本来的結果構文と派生的結果構文

影山（1996）は，動詞の意味によって結果構文を分類し，主動詞の意味に本来的に結果状態が含意され，それを結果述語が記述するような結果構文を「本来的結果構文」と呼んでいる。他方，動詞の意味に結果状態が含まれず，結果述語が変化結果を継ぎ足すような結果構文を「派生的結果構文」と呼んでいる。Washio（1997）では，この「本来的結果構文」を「弱い（weak）結果構文」と，「派生的結果構文」を「強い（strong）結果構文」と呼んでい

[2] 小野（2007a: 6）は「使役移動構文に加え，非使役的な方向性移動詞（verbs of directed motion）や移動様態動詞（verbs of manner of motion）も結果構文に含まれるかどうかは意見の分かれるところである」と述べている。

る。ここでは，影山（1996）の用語を使って説明する。

具体例にあたる前に，小野（2007b: 67-68）の本来的結果構文に関する３つの指摘を下に掲げておく。

・「本来的結果構文では，動詞が何らかの変化の結果を含意し，結果述語がその含意された結果を具体的に表す働きをする」
・「結果述語は動詞の意味の一部を具現化している」
・「本来的結果述語は動詞によって選択され，その生起は動詞に依存する」

以上の３つの指摘を念頭に置いて，本来的結果構文の具体例をみてみよう。以下の文はすべて本来的結果構文の例である。

a．She painted the wall *red*.
b．Mary froze it *solid*.
c．The child broke the vase *to pieces*.
d．She polished the shoes *to a brilliant shine*.

a．において，主動詞（paint）は「塗る」の意味であり，「塗る」という行為は目的語（the wall）に何らかの変化の結果を含意し，結果述語（red）がその含意された結果を具体的に表わしている。従って，結果述語（red）は動詞（paint）の意味の一部を具現化したことになり，かつ，この red の生起は動詞に依存しているといえる。d．も同様で，主動詞（polish）は「磨く」の意味であるから，必然的に目的語（the shoes）に何らかの変化の結果を含意しており，結果述語（to a brilliant shine）は動詞（polish）の意味の一部を具現化しているといえる。

次に派生的結果構文をみてみよう。本来的結果構文と同様，小野（2007b: 67-68）は派生的結果構文の特徴を次のように３つにまとめている。

・「派生的結果構文では，主動詞は結果を含意しない」
・「派生的結果述語の表す結果状態は動詞の意味には本来含まれず，構文上で付け足されたものと見なすことができる」
・「派生的結果構文では動詞の意味とは独立して結果状態を示すので，結果述語の動詞との関係は比較的自由で必ずしも動詞によって制限されるとは言えない」

これらのことを頭に入れて，派生的結果構文の具体例にあたろう。

e．John hammered the metal *flat* / *straight*.
f．I laughed myself *silly* / *to death* / *sick* / *crazy*.
g．They drank the pub *dry* / *clean* / *empty*.
h．I danced myself *tired*（×××　？）/ *to exhaustion*（○○○○）/ *silly*（○○○○）/ *stupid*（×○○？）/ *sweaty*（××？○）/ *breathless*（○○○○）/ *thin*（？○○○）/ *slim*.（？○○○）

e．において，主動詞（hammer）は「槌で打つ」の意味であり，結果を含意していない。従って，動詞の意味とは独立して結果状態を示し，結果述語は動詞によって制限されないので，flat, straight のように複数の結果述語が生起することになる。

h．の文の（　）は，著者が結果述語の容認性を４人のインフォーマントにチェックした結果を示している。[3] この結果をみて分かるように，容認性に若干の違いはあるものの，結果述語として，to exhaustion，silly，stupid，sweaty，breathless，thin，slim が生起しており，結果述語の動詞との関係は比較的自由であることが分かる。同じ意味合いを持つ to exhaustion と tired で，前者が容認されて後者が容認されないのは，to exhaustion は PP で方向性があり，tired は AP で状態を示していて方向性を持たないことが理由のように思われる。また，thin と slim が容認されるには，主語の I が「ダイエット中である」という文脈が必要である。次に telic verb（完結動詞）と atelic verb（非完結動詞）の視点から結果述語の容認性をみてみよう。

⑼　telic verb（完結動詞）と atelic verb（非完結動詞）

結果述語の容認性は telic verb と atelic verb の観点からも説明できる。下記 a. の動詞 shoot（射殺する）は telic verb で動作が完結しており，結果述語として dead と to death の両方が容認される。この場合，「射殺する」が「即死」を意味する時は dead，時間的に幅がある場合は継続性をもつ to death が選択される。

b．の動詞 work は「働く」の意味で，atelic

[3]（　）内の左２つがイギリス人，右２つがアメリカ人によるチェックの結果を示す。

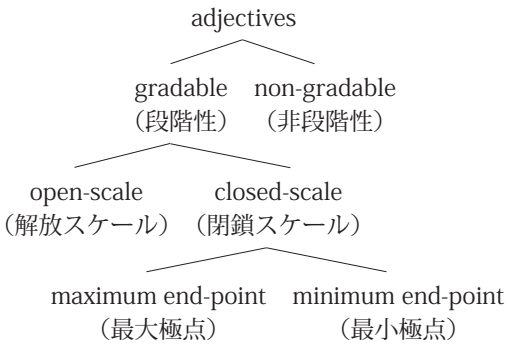
verb であるため動作が完結していないので，方向性を示す to death が容認され，状態を示す dead は容認されない。c．の batter も同様で，「乱打する」の意味を持つ atelic verb なので，to death は容認されるが dead は容認されない。

a．He shot the tiger *dead / to death*.（cf. He shot the tiger in one minute / *for one minute.）
b．He worked himself **dead / to death*.（cf. He worked *in one hour / for one hour.）
c．The rabbits had apparently been battered **dead / to death*.（Wechsler 2005: 267）

次に結果述語の容認性を形容詞のスケール構造の観点からみてみよう。

⑽ 結果述語のスケール構造（scalar structure）

Wechsler（2005: 261-270）は結果述語の容認性を，形容詞のスケール構造を用いて説明している。形容詞を意味の段階性（gradability）の観点から，gradable な形容詞（例：short, cool, tall, long, wide, straight, flat, wet, dirty など）と no-gradable な形容詞（例：dead, triangular, invited, sold など）に分類している。同じ gradable な形容詞でも，スケールが解放されているもの（例：short, cool, tall, long, wide など）と閉鎖されているもの（例：straight, flat, wet, dirty など）とに分類している。さらに，スケールが閉鎖されている形容詞を最大極点（maximum end-point）を持つもの（例：straight, flat など）と最小極点（minimum end-point）を持つもの（例：wet, dirty など）とに分類している。以上のことを図で表すと下記のようになる。



（Wechsler 2005: 263）《（ ）内の日本語は著者による》

以上のことを，具艇的な例文を用いて説明する。

a．He and a confederate shot the miller *dead / to death*.（Wechsler 2005: 267）

a．の主動詞 shot は「射殺する」の意味で telic verb である。従って動作が完結しているので結果述語としては，基本的には dead のような段階性の意味を持たないものが生起する。ただし，⑼で述べたように，「射殺する」が「即死」ではなく時間的に幅がある場合は段階性（継続性）をもつ to death が選択される。

b．The rabbits had apparently been battered **dead / to death*.（ibid.）

b．の主動詞 battered は「乱打する」の意味を持つ atelic verb なので動作が完結しておらず，従って段階性を持たない dead は容認されず，段階性（継続性）のある to death は容認されることになる。

c．He hammered the metal *flat / straight / *long / *wide / *thin*.
（cf. flatter / straighter / longer / wider / thinner）
（cf. completely, perfectly flat / straight / *long / *wide / *thin）

上記 c．の hammered の結果述語としては，解放スケール，つまり極点（end-point）をもたない long，wide，thin などは容認されない。一方，閉鎖スケールの flat，straight のように極点を持つものは生起する。cf. で示しているように，極点を持つかどうかは，completely，perfectly などの副詞が修飾可能であるかどうかで知ることができる。付言しておくと，flat，straight，long，wide，thin はいずれも比較級の -er を付加することができるので，段階性がある点では共通している。

d．He wiped it *clean / dry / smooth /*damp / *dirty / *stained / *wet*.（Wechsler 2005:

[4] 北原（2009: 324-325）は，最大極点と最小極点に関して，「dry は，例えば濡れていたタオルが水分を全く含まず完全に乾いた程度が，それ以上乾いた状態にならない点，即ち，最大極点である。… 他方，一滴でも水滴があれば wet と言える。この場合，水一滴が最小極点である。」と説明している。

265）

上記 d．の clean，dry，smooth，damp，dirty，stained，wet はいずれも閉鎖スケールに属す。閉鎖スケールの clean，dry，smooth などは，主動詞 wiped の結果述語として容認されるけれども，同じ閉鎖スケールであっても damp，dirty，stained，wet などは容認されない。その理由は，wiped は「（水気を）ふき取った」結果，対象物の it（例えば濡れたハンカチ）が完全に乾き且つそれ以上乾いた状態にならないことをさすため，最大極点をもつ dry が容認される。一方，wet は一滴でも水滴があれば wet であり，最小極点を持つことになる。従って，wiped の結果述語として wet は容認されない。[4)]

3．過去分詞，現在分詞から派生した AP はなぜ認可されないか

この節では，過去分詞から派生した AP はなぜ結果述語として認可されないかを考える。具体的な結果述語の例にあたる前に，形容詞性（adjectiveness）と動詞性（verbness）について整理しておこう。下記 a．において，副詞 carefully は opened を修飾しており，opened は動詞 open の過去分詞で形容詞の open に比べて動詞性が保持されているために，容認される。b．が容認されないのは，動詞性のない形容詞 open を carefully が修飾しているからである。c．が容認され d．が容認されないのも同じ理由に拠る。f．が容認されないのは，動詞性を持つ opened は動詞 built の補語としては生起しないからである。

g．の open door は「開いているドア」，opened door は「開けられたドア」であり，h．の shiny shoes は「ピカピカの靴」，shined shoes は「（ピカピカに）磨かれた靴」の意味である。opened と shined の両者ともに動詞性が保持されている。i．の closed door は「閉じているドア」と「閉じられたドア」の２つの解釈が可能であり，前者は形容詞性が高く，後者は動詞性が高い。

a．The package remained carefully *opened*.
b．*The package remained carefully *open*.
c．the carefully *opened* package
d．*the carefully *open* package
e．This door was built *open*.
f．*This door was built *opened*.
（Embick 2004: 357）

g．the *open* / *opened* door
h．the *shiny* / *shined* shoes
i．the *closed* door

Embick（2004: 358）は open のような形容詞を ‘simple state’，opened のような participial form（分詞形）を ‘resultative state’ と定義している。さらに resultative state とは ‘one that requires a previous event’ と述べている。この定義によれば，opened は，「open（開ける）という先行するイベントの（後の）結果的状態」ということになる。上記 f．が容認されないのは，opened は動詞 open の先行イベントを必要とするため，高い動詞性が保持されているためであると言える。付け加えておくと，この simple state と resultative state は adjectiveness と verbness と平行関係にある。

次に，意味的な側面から結果構文の意味構造を見てみよう。小野（2007a: 4）は結果構文の意味構造を次のように示している。

X CAUSE [Y BECOME Z] BY [XVY]

これは，「X(=S) が Y(=NP) に対して V(動作) をすることによって，状態変化 Z を引き起こす」と解釈できるとしている。これに従えば，例えば，下記 j．は I caused the door to become open by pushing it. と書き換えることができる。この場合，open の位置に動作性を保持している opened は生起しない。k.，l.，m．も同様で，動作性のある shined，flattened，wilting（しぼんでいる），sweating（汗ばんでいる）は結果述語として容認されない。

j．I pushed the door *open* / **opened*.
k．The maid scrubbed the pot *shiny* /**shined*.（cf. *carefully shiny shoes / carefully shined shoes）
l．The gardener watered the tulips *flat* / **flattened* / **wilting*.
m．The joggers ran themselves *sweaty* / **sweating*.

下記 n．の closed，shut は過去分詞派生の語であるが，opened とは異なり，「閉じている」の意味で動作性が残っていないため容認される。同様に，o．の ragged は形式上は rag からの過去分詞派生の語であるが，動詞性は保持しておらず，「ぼろぼろの」意味を持つ形容詞とみなすことができるた

め，結果述語として容認される。

n．I pushed the door *closed* / *shut* / **opened*.
o．He ran his sneakers *ragged*.（彼は走り込んでスニーカーがぼろぼろになった。）

今までに論じてきたことをまとめると，RP の位置に生じる AP は形容詞性（状態性）が求められる。従って，shined，sweating などの動詞性（動作性）の残る過去分詞，現在分詞は認可されないと言える。

参考文献

Carrier, Jill and Janet H. Randall.1992. “The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives.” Linguistic Inquiry Vol.. 23, No. 2: pp. 173-234

Embick, David. 2004. “On the Structure of Resultative Participles in English.” *Linguistic Inquiry* Vol.. 35, No. 3: pp. 355-392

Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.

影山太郎．1996.『動詞意味論－言語と認知の接点』くろしお出版

影山太郎．2007.「英語結果構文の意味分類と統語構造」,『結果構文研究の新視点』小野尚之（編），33-65，ひつじ書房

影山太郎．2009.『形容詞・副詞の意味と構文』くろしお出版

北原博雄．2009.「動詞の語彙概念構造と「に」句のスケール構造・統語構造に基づいた，着点構文と結果構文の平衡性,『結果構文のタイポロジー』小野尚之（編），315-364，ひつじ書房

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA: MIT Press.

Maruta, Tadao. 1995. The Semantics of Depictives. English Linguistics 12: 125-146.

Napoli, Donna Jo. 1992. Secondary Resultative Predicates in Italian. *Journal of Linguistics* 28: 53-90.

小野尚之．2007a.「序論―結果構文をめぐる問題」,『結果構文研究の新視点』小野尚之（編），1-31，ひつじ書房

小野尚之．2007b.「結果述語のスケール構造と事象」,『結果構文研究の新視点』小野尚之（編），68-101，ひつじ書房

鈴木亨．2007.「結果構文における有界性制約を再考する」,『結果構文研究の新視点』小野尚之（編），103-141，ひつじ書房

Rothstein, Susan. 2004. *Structuring Events.: A study in the semantics of lexical aspect*. Oxford: Blackwell

Simpson, Jane. 1983. “Resultatives.” *Papers in Lexical-functional Grammar*, ed. L. Levin, M. Rappaport and A. Zaenen. pp. 143-157. Bloomington, Indiana: Indiana University Linguistics Club.

Tuzuki, Masako. 1998. Depictive Secondary Predicates Versus Conditional Secondary Predicates. *English Linguistics* 5: 71-90.

都築雅子．1989.「英語における二次的述語の考察」，英文学研究，66（1），33-50，日本英文学会

Washio, Ryuichi. 1997. ” Resultatives, compositionality and language variation.” *Journal of East Asian Linguistics* Vol. 6: pp.1-49.

Wechsler, Stephen. 2005. “Resultatives Under the ‘Event-Argument Homomorphjism’ Model of Telicity.” *The Syntax of Aspect*, ed. by Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport, 255-273, OUP.